

Title	Soziale Beziehungと Gesellschaftliches Verhältnis [1]
Sub Title	"Soziale Beziehung" und "Gesellschaftliches Verhältnis"
Author	大淵, 英雄(Ohbuchi, Hideo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1976
Jtitle	哲學 No.64 (1976. 1) ,p.79- 99
JaLC DOI	
Abstract	Max Weber hat einmal mit besonderem Nachdruck behauptet, dass nicht alle menschlichen Berührungen von sozialem Charakter sei, dass nicht jede Art von menschlichem Verhalten als soziales Handeln angesehen werden könne usw. Nach den Behauptungen Max Weber also konnte das soziale Handeln derart aufgefasst werden, dass es aufs Verhalten anderer und aufs von den anderen orientierte Verhalten bezogen werden solle. Die soziale Beziehung sei andererseits eine Beziehung, die die Handelnden miteinander teilten, d. h. ein je nach dem Sinngehalt gegenseitig eingestelltes und davon orientiertes Sichverhalten der beteiligter Handelnden. Max Weber kategorisiert die soziale Beziehung in zwei Gattungen : Vergemeinschaftung und Vergesellschaftung. Die erstere bedeute die soziale Beziehung eines Handelns, welches auf subjektive gefühlter (affektueler oder traditioneller) Zusammengehörigkeit der Beteiligten beruhe. Die letztere sei die soziale Beziehung eines Handelns, welches auf rational (wert- und zweckrational) motiviertem Interessenausgleich oder Interessenverbindung beruhe. Konsequenterweise habe, so Max Weber, die soziale Beziehung teils den Charakter der Vergemeinschaftung, teils den der Vergesellschaftung. Der Mensch, wie den Max Weber bestimmte hat, kann kein wirklich existierender Mensch sein. Max Weber kommt also nie dazu, das menschliche Verhalten als gesamte Tätigkeit wirklicher Individuen oder als Zusammenwirken von denen aufzufassen. Mit dem Begriff : " soziale Beziehung " ist bei Max Weber also nur auf ein abstrahiertes Menschenbild bezogen. Karl Marx begreift dagegen die Menschen als wirklich zusammenwirkende Individuen und die Gesellschaftlichkeit des menschlichen Wesen als Zusammenwirken mehrerer Individuen, die im Zusammenhange stehen. Das Verhalten der Menschen kann als Ausdruck des menschlichen -gesellschaftlichen Wesens gefasst werden, ihr Verhältnis zueinander als ein in der Gesellschaft objektirtes Verhalten. "Gesellschaftliches Verhältnis" erklärt sich aus der Vergegenständlichung des auf menschlichem Wesen beruhenden Verhaltens. Von diesem Gesichtspunkt aus begreift Kar Marx menschliches und gesellschaftliches Wesen als Gemeinwesen. "Gemeinschaftliches Verhältnis" gemeint, wenn es unmittelbarer als Ausdruck von persönlicher Beziehung der Individuen zueinander, und als unmittelbarer Ausdruck von Gesellschaftlichkeit der Menschen gefasst wird. Aber dieser Ausdruck bedeutet nicht immer die menschliche Beziehung als solche, sondern, in Wirklichkeit, unter den gesellschaftlichen Bedingungen borniertes Verhältnis der Individuen zueinander. Gesellschaftliches Verhältnis im hier verstandenen Sinn dieses Wortes fasst in sich gemeinschaftliches Verhältnis, d. h. gemeinschaftliche Beziehung.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000064-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Soziale Beziehung と Gesellschaftliches Verhältnis [1]

大 淵 英 雄

私は、この小論において、社会学の基礎的な概念の一つである社会的関係を再考しようと思う。

社会的関係は、あまりにも、基礎的な概念であるがゆえに、今日では、それを直接問題にすることは殆んどなくなったといっても過言ではない。その理由の一つは、「社会的関係」が、あまりにも、自明であるとみなされていることにある。そこでは、社会的関係の特定の意味が前提され、固定化され、その基盤としての具体的な人間との関連が軽視されてはいなかったであろうか。その結果、社会なるものが、固定的な意味をもつものとして前提され、その前提が、現実の具体的な人間から検討されることなく、逆に、現実の人間の豊かな具体的な存在が、その前提の抽象的・固定的な意味ないし意味体系に還元され包摂されるに至ってはいなかったか。かかる無批判的な前提への還元、すなわち、社会的事象の社会的なるものへの還元が、現実の具体的な人間の把握の名のもとに、くりかえされてきてはいなかったか。

たとえば、集団人と個との特定の対立的情况が、集団一般と個人一般とに拡大され、集団と個人との一般的対立情况が想定されるに至る。そこでは、特定の関係が一般的に想定された関係に還元される。したがって、特定の関係は、つねに、一般的に想定された関係を基準としてのみ理解されたとみなされる。そこでは、特殊なもの・具体的なものよりも、一般的なもの・抽象的なものが豊かな価値をもっていると想定されているからである。

その結果、社会的関係の担い手としての現実の人間が、自己の豊かな具体性を捨象されて登場してくる。具体的な人間が、つねに、抽象的人間として想定され、そのかぎり、特定の対立的情况が、集団一般と個人一般との情况のように固定化されることになる。そこでは、現実の諸個人を拘束する特定の集団が、人間の対象的な関係行為と切り離されて、つねに、諸個人と対立する項としてとらえられることになる。諸個人の対象的な関係行為の所産としての集団は、諸個人を拘束するとともに、それがいかに限定されたものであろうとも、集団はまた諸個人が相互に補完的関連を有する共同存在者としての人間的生活の表現——自己表現でもある。集団がこの二重の関係であるとすれば、集団の諸成員がともに共同存在者としての自己を表現したものが、集団であり、この自己表現の同一性が、そのものとして産出されずに、特定の諸条件のもとで形態づけられるところに、集団と諸成員との間に特定の対立的な情况が形成されるのである。そこでは、相対立的な特定の形態を通してのみ、したがって、限定された自己表現ではあるが、諸個人が共同存在者であることが確証されるのである。

それにもかかわらず、相対立する特定の形態を通してのみ、集団と諸個人との関連一般をみるのであれば、そこでの関連は固定化される。したがって、その固定化が、また、特定の形態において表現されている限定された人間を、人間なるものとして、二重の意味で固定化することにもなる。

それは、特定の形態内的な関係を、人間関係・社会的関係として提示することにほかならない。すなわち、一般的な表現の背後にある特定の限定された関係を問題にすることなく、その関係を本来的な関係として想定し、前提とすることによって、限定された諸関係を関係一般として、無前提的な関係一般としてみなしていることにほかならない。そこでは、特定の形態内的な関係が、あらゆる形態にもみられる関係として、特定の形態をこえて展開される。

したがって、それは、現実の人間の具体的な諸関係よりも、その人間の

具体性を捨象するがゆえに抽象的・論理的な整合性を重視するものであろう。しかも、その整合性が、現実の人間からの隔たりによって判断されている事例は、枚挙にいとまがない。論理的整合性を確保するために、現実の具体的な人間を様態変化させ、具体的な人間の代りに、特定の人間像への信仰を保持してきてはいなかったであろうか。現実の人間の豊かな具体性を、いかに科学的に対象化するかという基本的な視点を、自覚的に保持する姿勢すら、「科学」に買却し、無反省的に、特定の形態内的な関係を一般化し、社会的関係一般とみなすことによって、特定の形態の温存・維持を結果的に果してきてはいなかったであろうか。

現実の人間が、特定の人間像のもとでのみ理解されれば、社会的諸関係の担い手である具体的な人間が、社会的諸関係の間の函数式の定数とみなされる。それゆえに、社会的諸関係の変化をみとめるも、その社会的諸関係の基盤である現実の人間（実は特定の人間像）が、つねに、不変性を有するものとして固定化され、そのかぎりでは、人間的基礎から切断された社会的諸関係が、整合性のモデルへと還元可能なものとなる。つまり、特殊性が一般性に、変化が不変なるものに還元されてきたのではなかろうか。

このように無批判的に前提してきたものを意識化し、その前提の基礎としての特定の人間像にかわる現実の具体的な人間の対象的な関係行為の相互交換として、社会的関係をとらえなおすこと、そのことによって、行為の相互交換に貫徹している共同存在者としての人間的な生活表現と、それを全面的には開示させぬ限定された特定の生活形態とを区分するとともに、両者の関連的な現解をなすこと、これが、無意識の流れに漂ってきた者の課題であろうと考える。

まず、社会的諸関係の人間的な基礎をとらえておかねばならぬ。K. マルクスは初期の著作に、「人間の[・]本質 (Wesen) は、人間が[・]真に、[・]共同的な[・]本質であることにあるのだから、人間は彼らの[・]本質 (Wesen) の發揮に[・]

よって人間的な共同体 (Gemeinwesen) を、すなわち、個々の個人に対立する抽象的・普遍的な力ではけっしてなく、それ自体それぞれの個人の本質 (Wesen) であり、彼自身の活動、彼自身の生活、彼自身の精神、彼自身の富であるような、社会的な組織^{ヴェーゼン}を創出し、産出する。」¹⁾ とのべている。

ここには、Gemeinwesen が二ヶ所にでてきている。一つは人間の本質としての Gemeinwesen であり、二つは人間が自己の本質を発揮して創造し産出する Gemeinwesen である。前者が「共同的な本質」、後者が「共同体」と訳されているが、これらからは、両者がともに Gemeinwesen という同一語で表現され、したがって、両者の関連性が表現されている文意が十分に伝えられぬ。前者の Gemeinwesen、すなわち、人間の本質としての Gemeinwesen は、人間が相互に共同的なあり方をなしていることを、つまり、人間が共同存在者であるという性格を意味している。後者の Gemeinwesen は、人間の共同存在者としての性格を対象化したものであり、したがって、自己の対象化としての人間的な生活の共同組織の意味での Gemeinwesen である。それは、また、人間の共同存在者としての性格を特定の形態において対象化したものである。それゆえに、この共同組織としての Gemeinwesen は、人間の共同存在者としての Gemeinwesen を対象化したものであるから、その共同組織には、人間的な本質 Gemeinwesen が貫徹していることになる。共同組織が、「個々の個人に対立する抽象的・普遍的な力ではけっしてなく、それ自体それぞれの個人の本質」であるのは、共同組織が人間的な本質の一表現であるからである。

とはいえ、それは無条件にいえることではない。「だが人間が、自己を人間として認識しておらず、それゆえ世界を人間的に組織しておえていないうちは、この共同的な本質 [Gemeinwesen] は、疎外の形態のもとで現象するのである。」²⁾ と。これは、人間の本質としての Gemeinwesen が、共同組織の疎外の形態で表現されているか否かにかかわらず、共同組織に貫通しているとみていることを示している。

また、K. マルクスは、「社会 [Gesellschaft] をまたしても捨象物として個人に固定的に対置することは、わけても避けられねばならない。個人は社会的存在者である [Das Individuum ist das gesellschaftliche Wesen.]⁹⁾」ともいう。つまり、Gesellschaft を個人に固定的に対置することを拒み、逆に、個人の存在こそが gesellschaftlich なものであるとみている。

gesellschaftlich は次のように規定されている。すなわち。「社会的 [gesellschaftlich] というのは、いかなる条件のもとであれ、いかなる様式においてであれ、またいかなる目的のためであれ、ともかく、複数の諸個人の協働 [das Zusammenwirken mehrerer Individuen] ということの謂いである。⁴⁾」という。そして、この「諸個人の協働」に、諸個人相互間の人格的な関連 [die persönliche Beziehung der Individuen zueinander] が、貫通していることをみぬいた。この人格的な関連は、人間的行為の、したがって、社会的行為の相互交換、または、その所産としての生産物(価値)の相互交換、すなわち、相互補完の意味における人格的関連である。

それは、また、「交換あるいは交換取引は、したがって、私的所有の内部での人間の社会的な行為、類的行為、共同的本質 [Gemeinwesen]、社会的な交通 [gesellschaftlicher Verkehr] と統合であり、それゆえ外的な、外在化された類的行為である。⁵⁾」との規定にもみられるように、私的所有の枠内においても、諸個人の協働は、相互交換・相互補完を通して貫徹していること、しかも、そこでも、人間的本質としての Gemeinwesen を実現するためにも、人間的・社会的欲求を相互に獲得・充足し合う社会的交通を通して、諸個人の協働がなされていることをみている。

人間が共同存在者 [Gemeinwesen] であることは、この意味で、つねに、諸個人の協働を通して自己を対象化するとともに、自己を獲得する存在の意味である。つまり、人間が共同存在者であるとは、同時に、社会的存在者 [gesellschaftliches Wesen] であることにほかならない。それゆえに、

人間的 [menschlich] であることは、社会的 [gesellschaftlich] であることと同義であることになる。両者が同義であることによって、人間が自己の対象化として共同組織 [Gemeinwesen]・社会的組織 [gesellschaftliches Wesen] を創造・産出し、そのことによって、また、自己を人間的・社会的存在者として獲得することになるのである。

「そしてこの協働の様式 [diese Weise des Zusammenwirkens] がそれ自身一つの „生産力“ [Produktivkraft] なのである。⁶⁾」と、K. マルクスはいふ。つまり、複数の諸個人の協働の様式が、実は、共同存在者であるがゆえに相互に協働する諸個人の現実の力となり、しかも、共同組織・社会的組織をうみだす力、したがって、自己自身を共同存在者として獲得する力 (Produktionskraft でなく, Produktivkraft) であるという。そうであれば、この生産的な力 [Produktivkraft] とは、協働する諸個人の力として、つねに、生産的な諸力 [Produktivkräfte] としてのみあり、そのかぎりで諸個人の協働として社会的に編制されてのみ存在することになる。

人間が、諸個人の協働を通してのみ、自己の共同存在者 [Gemeinwesen] の確証を得ることができるのであるから、諸個人の協働の関係、つまり、相互依存・相互補完としての諸個人相互間の交通の関係が、社会的関係としてとらえられることになる。そこでの人間は、諸個人の協働によって、自己の gesellschaftlich な存在を対象化・獲得するのであるから、「その生活活動と直接に〔無媒介的に〕一つのものである」ような動物とは異なる。動物が、「ただ直接的な肉体的必要に押されて生産するのにたいして、人間自身は肉体的必要から自由な状態においてこそほんとうの意味で生産する。動物はただそれ自身のみを生産するのにたいして、人間は全自然を再生産する。動物の産物は直接にその身体に所属するのにたいして、人間は自由に彼の産物に立ち向かう。⁷⁾」との人間把握がなされている。

また、人間は「対象的世界の加工」において、自己の生活活動を自己の

意志および意識の対象にする。この意味で自己の生活活動とは、対象的な関係行為 [Verhalten] にほかならない。これにたいして、「動物にとっては他のものと関わる彼の関係 [Verhältnis] は関係 [Verhältnis] としては実存しない。⁸⁾」と、マルクスはみる。

人間が自由に立ち向かう自己の産物とは、人間をもその一部として含む自然（それは、つねに、人間的な生活活動を媒介した自然）と、諸個人の協働とである。したがって、「この自然宗教ないし、自然に対するこの一定の関わり合い [dies bestimmte Verhalten zur Natur] は、社会形態 [die Gesellschaftsform] によって制約されており、また逆にそれが社会形態を制約する。どこでもそうであるが、ここでも、自然と人間との同一性が実に次のような具合に現出している。すなわち、自然に対する人間の局限された関わり合いが人間相互間の局限された関わり合いを制約し、そして、人間相互の局限された関わり合いが自然に対する彼らの局限された関係 [Verhältnis] を制約する。けだし、自然がまだ殆んど歴史的に変様されていないからである。⁹⁾」

ここでの社会形態とは、協働する諸個人が相互にとり結ぶ関係行為の特定の関連 [Beziehung] としての交通の形態であり、対象化された Gemeinwesen の現実的な形態にほかならない。自然と人間との同一性と、その同一性ゆえに、自然と人間との相互規定・相互媒介とを貫ぬく関係行為 [Verhalten] として人間の生活活動をとらえ、その関係行為の対象化としての関係 [Verhältnis] を自然的関係 [ein natürliches Verhältnis] と社会的関係 [ein gesellschaftliches Verhältnis] との二重の関係 [ein doppeltes Verhältnis] としてみる基礎的な視座を獲得したのである。

しかし、对自然的な関係行為の対象化である自然的関係が、社会的関係と相互に制約しあう関連を有することを認めただうえで、ここでは、社会的関係についてのみ考えざるをえない。

さて、社会的関係とは、協働する諸個人が相互にとり結ぶ対象化された

関係行為にほかならないから、それは諸個人の協働としての gesellschaftlich については、明らかに gemeinschaftlich との対比においてとらえられている。すなわち、「共同 [gemeinschaftlich] の活動と共同 [gemeinschaftlich] の享受、換言すれば、他の人間たちと現実的にいっしょにいる [Gesellschaft] なかにじかに [unmittelbar] あらわれ^{あかし}証される活動と享受は、社会性 [Gesellschaftlichkeit] の直接的なあらわれが活動と享受の内容の本質のうちに基礎をもってこの内容の性質に合っている場合はどこでも起こることであるとはいえ、しかし社会的 [gesellschaftlich] な活動と社会的 [gesellschaftlich] な享受はかならずしも直接、共同 [gemeinschaftlich] に活動し直接、共同 [gemeinschaftlich] に享受するというかたちにおいてのみ存在するとはかぎらない。¹⁰⁾」

ここでは、諸個人の協働としてなりたっている現実の Gesellschaft において、人間の活動と享受とが、あるいは自己の gesellschaftliches Wesen の現実的な表出である Gesellschaftlichkeit が、無媒介的な人格的関連 [die persönliche Beziehung] に基礎づけられ適合しているのが、gemeinschaftlich であるとみている。ただし、それは、複数の諸個人の協働として gesellschaftlich をとらえ、しかも、人間が gesellschaftliches Wesen であることの表出として gesellschaftlich をみているのであから、gesellschaftlich とは人間の活動と享受との相互交換を貫通していることになる。だから、人間は gesellschaftliches Wesen であると同時に、Gemeinwesen でもあるということになる。

共同存在者としての人間が相互に交換不可能な人格 [Person] による結合として、無媒介的に諸個人の協働を現実的に表出するとき、そこに、gemeinschaftlich をみるのである。それゆえに、人間の活動と享受とが gesellschaftlich なものであるが、そのことは、ただちに、gemeinschaftlich であるのではなく、gemeinschaftlich といえるのは、協働する諸個人相互間に人格的な関連が無媒介的に人間的交通として表出されている場

合にかぎられる。

人間の本質である *Gemeinwesen* が、獲得さるべきものとしての人間的活動であるのは、その活動が現実には人間の局地的存在と非自立的な存在とにより限定された自己の *Gemeinwesen* の対象化にほかならないからである。しかも、その限定された対象化は諸個人の協働を通して、したがって、人間的・社会的 [*gesellschaftlich*] な交通を通してなされるものであるから、まず、*gesellschaftlich* であり、それが、また、自己の人格性の対象化であり同時に、人間的欲求の相互的充足・補完としての人間的活動であるがゆえに、そこには人格的な相互依存関係が存在する。その人格的な相互依存関係がそのまま *gemeinschaftlich* であるのではなく、それが物的な姿態 [*eine dingliche Gestalt*] をとらずに、直接、人格的な関連を表出するときに、それが *gemeinschaftlich* と規定される。

そうであれば、歴史貫通的な *Gemeinwesen* の現実的な姿態が、いかに限定された *Gemeinwesen* であろうとも、そこには、物的な姿態をとろうとも、人格的な相互依存関係が貫通していることになり、その背後には *Gemeinwesen* が貫通していることになる。

以上みてきたように協働する諸個人、すなわち、*gesellschaftlich* な諸個人の人間的な対象的な関係行為、人間的なふるまい [*Verhalten*] をとらえ、そのふるまいが、関係行為の相互結合・相互補完としての *gesellschaftlich* な協働する諸個人相互間の関係 [*Verhältnis*] として対象化されたものが、K. マルクスの *gesellschaftliches Verhältnis* にほかならぬ。そして、それが諸個人の協働としてあるかぎり、それは、つねに、複数の *gesellschaftliche Verhältnisse* として現実には存在する。この意味での社会的諸関係が、物的な姿態をとって表出されようとも、それらの関係の基底には、つねに、人間的ふるまい、対象的な関係行為が貫ぬいている。それゆえに、社会的諸関係が、直接、協働する諸個人相互間の人格的な相互結合・相互補完として表出されるときに、そこに、人格的な無媒介的な

関連 [gemeinschaftliche Beziehung] をみているのである。

人間的なふるまいである対象的な関係行為が、直接、人格的な関連の表出としての社会的関係をうみだすか、あるいは、それが物的な姿態としての社会的関係をうみだすかは、諸個人の現実の協働の様式に基づくものである。その様式は協働する諸個人の対自然的関係と対人間相互間の関係との総体としてのみありうる。したがって、諸個人相互間の関係 [Verhältnis] は、量化された関係・比例関係をも意味するとともに、また、その基底に人間的ふるまい、対象的な関係行為 [Verhalten] をすえた Verhältnis として示されたのである。

次に、Max Weber の社会的関係 [soziale Beziehung] を概観してみよう。

M. Weber は、gesellschaftliches Verhältnis ではなく、soziale Beziehung なる表現をしている。ゆえに、gesellschaftlich でなく sozial として、Verhältnis でなく Beziehung として表現した M. Weber の基本的な視座を明らかにしなければならぬ。

そのためにも、まず、M. Weber の概念規定をあとづけねばならぬ。M. Weber は、行為 [Handeln] を人間的行動 [ein menschliches Verhalten] であるとし、それを行為者が自己の主観的におもわれた意味に結びつけた行動 [Verhalten] であると規定する。この意味での人間的・有意味的な関係行為 [Verhalten]、すなわち、行為がその経過においてもその行為者によっておもわれた行為の意味に基づいて、他者の行動に関連づけられ [bezogen werden]、方向づけられるときに、その行為を「社会的」行為 [» soziales « Handeln] であるとみた¹¹⁾。

この社会的行為の規定においては、行為一般が社会的 [sozial] なものとはみなされていない。それは行動 [Verhalten=関係行為] 一般が行為であるわけではなく、それが特定の条件をみたすときにのみ、人間のふるまいであり行為であるとされ、その際の条件とは、行為とそこにこめられた行為

者の主観的な意味とがともに、他者の行動を予想し、それに関連づけられ、方向づけられて行為が経過することである。その条件をみたすときに、初めて、行為に社会性が形成されるとみている。したがって、行動が有意味である場合に、それが人間的であるとみなされるが、人間的であることが、そのまま、社会的 [sozial] であるとはとらえていないことが明らかである。

そこでは、人間的行動、すなわち、行為が他者の行動との間に主観的におもわれている、その関連性を社会性としてとらえているといえよう。

M. Weber は、行為でなく、社会的行為を社会学の対象にすえたのであるから、社会性を有せぬ人間の関係行為の存在を考え、それは社会学の直接の対象ではなく、対象＝社会的行為の理解の条件であるとしている。それは、行為を社会的行為 [soziales Handeln] と、非社会的な個人的な行為とを区分していることを意味している。そこでは、人間的であることが、そのまま、社会的であることではなく、したがって、人間的な関係行為が、直接、社会的な関係行為であるとは考えられない。しかも、行為者とその他者との間に相互的な関連が（当事者の主観において）形成されているのか否かは、社会的行為にとっては副次的な問題である。そこでは、行事者の主観的におもわれた意味が他者のふるまいに関連していれば、その関連が相互的でなく、仮に一方的であっても、それで社会的行為の規定は充分であるとみなされている。つまり、行為者が自己の行為の主観的な意味を、予想される、ないしは、期待した他者のふるまいに関連づけて行為をなしたときに、その行為が、sozial であると規定されているのである。

以上のことから、社会的な「関係」とは、特定の意味内容をもった人間的な行為によってうみだされたものとして存在するのであるから、その関係は、行為がその行為者以外の個人のふるまいに、その特定の意味に基づいて関係づけられ [bezogen werden] ている、正に、その関連 [Beziehung] が、「関係」[„Beziehung”] であるといえよう。そして、行為が他者のふ

るまいに意味的に関連づけられる [bezogen werden] ことが, sozial であったのであるから, 「関係」は, soziale Beziehung の意味になる. つまり, 他者との行為的関連, したがって意味的関連が, 関係 [Beziehung] であり, その関係は, 行為者のふるまいを予想し, 期待しているのであるから, それは, つねに, 社会的 [sozial] な関係としてのみ, 「関連」[„Beziehung“] がとらえられることになる.

M. Weber は, 以上の意味における soziale Beziehung を, Vergemeinschaftung と Vergesellschaftung とに大別している.

Vergemeinschaftung とは, 社会的行為が関与者たちの主観的な共属 [Zusammengehörigkeit] に基づいて行われる社会的関係であるとし, Vergesellschaftung とは, 社会的行為が合理的に動機づけられた利害の調整 [Interessenausgleich] か, あるいは利害の結合 [Interessenverbindung] かに基づいて行われる社会的関係であると規定している¹²⁾.

両者の社会的関係は, それをうみだす社会的行為が何に基礎づけられているかによって区分されている. Vergemeinschaftung においては, 特定の諸個人が, 特定の感情的価値または伝統的価値のもとに, 合一し共属し合っていると感じられること (相互主観的に感じられること) が, それら諸個人間の行為的・意味的関連づけの基礎をなしている. そこでは, 行為が, 感情的ないしは伝統的な動機に基づいているかぎり, 合理的な動機をこえた非合理的な動機の性格が重視されている. それに対して, Vergesellschaftung においては, 特定の諸個人間に合意された合理的な協定 [Vereinbarung] が存在し, その範囲内において, 相異なる諸価値 (利害) の相互的充足をめざして, 諸価値の相互交換的な調整 [Ausgleich=取引] が, あるいは, 特定の諸個人間に主観的に設定された共通の目的 (価値) の実現のために, 相互に共通する利害 (価値) の結合 [Verbindung=交渉・取引] をめざすことが, 特定の諸個人間の基礎をなしている. さらに, かかる行為者相互の取引協定の厳守が, 自己の責務 [die einige Verbind-

lichkeit] であるとの信念に向けられて行われるとき、その行為は価値合理的な行為であり、取引協定の厳守を自己にではなく相手方に期待し、その期待に応えてくれることを予想して行為が行なわれるとき、それは目的合理的な行為であるとみる。

いずれにしても、Vergesellschaftung をなす行為の動機が、合理的・知的なものであるとみているが、そこでは、協定の厳守を自己の責務であるとみなすこと（価値合理的）と、それを相手方に求めて行為をなすこと（目的合理的）とが区分され、そのかぎりで、目的と価値とが区分され分断された姿態を、普遍性を有する事実として固定化することになっていることを注意しておこう。

Vergesellschaftung をとり結ぶ行為の動機が、合理的な動機に限定されているのであるから、感情的または伝統的に特定の価値への共同所属 [Zusammengehörigkeit] の意識（一体感または連帯意識）に支えられた諸個人間の関連を成立させる Vergemeinschaftung とは明らかに異なり対立する社会的関係の類型として、Vergesellschaftung がとらえられている。

社会的関係の基本的な二類型の対立を、さらに、明らかにするのは、Vergesellschaftung をうみだす行為が、複数の相対立する利害の調整を、あるいは相対立する複数の利害のうちから、関与者たちにとって共通するとおもわれた利害の結合を、めぐって行なわれるとしたことである。Vergesellschaftung においては、諸個人が諸利害（価値）の対立のもとでとらえられている。そこでは、共通利害の結合をも包摂しているとはいえ、それは、相対立する諸利害のうちの特定の利害に関してのみの結合であり、その結合された利害（価値）を追求する結社のそれである。それは、共同の利害（価値）への共属の意識に基づく Vergemeinschaftung とは異なり、相対立する利害の調整あるいは結合をめざす諸個人の合理的な関連がなりたつときに、そのかぎりでの Vergesellschaftung なのである。

社会的関連 [soziale Beziehung], すなわち, 社会的関係 [soziale Beziehung] を, それがうみだされる行為の動機からとらえ, 類型化するのであれば, その動機によっては行為が相互的に対立するものとなったり, また, 行為の過程でその動機が特定の動機から他の動機へと転化することによって示されるように, 行為者がいかなる動機から行為をなすかは流動的である. したがって, 行為者が, つねに, 唯一の動機から行為をするとはかぎらず, そこでは主要なるものとして行為の動機がとらえられるのであり, さらに, その行為が社会的行為としてのみ社会的関係をうみだすのであれば, それは, 「大多数の社会関係 [soziale Beziehung] は [混合的なもので], 一部はゲマインシャフト関係 [Vergesellschaftung] の性格をもち, 一部はゲゼルシャフト関係 [Vergesellschaftung] の性格をもちあわせている¹³⁾.」ということである.

個人的資質や状況または行動の共通性 [Gemeinsamkeit] と, それをもたらす結果とに対する感情に基づいて, 諸個人が自己の行動を, 相互に方向づけるようになり, さらに, そこでの社会的関係 [soziale Beziehung] が共属感情 [eine gefühlte Zusammengehörigkeit] を明らかに示すようになり, すなわち, 社会的関係が Vergemeinschaftung としての性格を明確に示すようになって, 初めて, 「共同態」[, Gemeinschaft “] が成立すると, M. Weber はとらえている¹⁴⁾. しかも, その Gemeinschaft においても, 共属感情の存在にもかかわらず, そこでは生活機会 [Lebenschancen] や生きのこりの機会 [Überlebenschancen] が諸個人によって異なるとみる. それらの機会が, 仮に同等であるとしても, 性格的におとなしい者にたいする各種の抑圧 [Vergewaltigung] が, 現実には存在しているともいう¹⁵⁾. このことは, 相互主観的な共属感情が存在することが, ただちに, そこでの人びとの平等性を意味するのではないことを示している. つまり, Vergemeinschaftung にも, 不平等性ないしはその成立の可能性をみている. だが, かかる不平等性の存在が, また, ただちに, Ver-

gesellschaftung の存在を想定することにはならないのである。なぜなら、Vergesellschaftung は、行為の合理性に着目したうえでの社会的関係の意味であるからにはほかならない。

そのことは、また、Vergesellschaftung により結合した人びとが、当初にいただいていた目的を実現した後においても、その社会的関連 [soziale Beziehung] を持続することによって、そこに目的合理性をこえた共属感情を形成し、Vergemeinschaftung を創立することもありうることを同時に示すものである。

M. Weber は、「人間の接触 [Berührung] であればどんなものでも社会的な性格をもつ、というわけではない。そうではなくて、自分の行動が意味上他人の行動に方向づけられているばあいにかぎられる [nur ein sinnhaft am Verhalten des andern orientiertes eignes Verhalten].¹⁶⁾」と規定し、さらに、その行動の意味的根拠としての意味連関 [Sinnzusammenhang]、すなわち、動機から行為をとらえたのであるから、社会的関係の基本的二類型は、それゆえ、特定の Gemeinschaft や Gesellschaft の関係 [Beziehung] としてとらえたのでは決っていない。それは、gemeinschaftliche Beziehung ではなく、Vergemeinschaftung であり、gesellschaftliche Beziehung ではなく、Vergesellschaftung であることのうちに明示されているとはいえないであろうか。それは、Gemeinschaft や Gesellschaft の社会的関係ではなく、Gemeinschaft や Gesellschaft を形成する可能性を想定しうる、行動の主観的におもわれた意味に基づく諸個人間の関連 [Beziehung] を、その視点としているからである。その関連が、結果として、何をうみだすかは直接問題とせず、それが、行為者の行為の意味的根拠——共属または共属感情、ないしは利害の調整または結合——から、そして、その根拠の合理性・非合理性から、社会的関係の類型化がなされたのであった。

かかる社会的行為の関連、すなわち、社会的関係が、無媒介的に人格を

表出する関連 [persönliche Beziehung] と、何ものかに媒介されたかぎりでの人格を表出する関連 [sachliche Beziehung] との対比、さらに、日常性と非日常性との異次元間の関係・関連、としても、展開されるが、それらの基底には、以上の意味の社会的な関係・関連 [Beziehung] がすえられているのであるから、この Beziehung の上に展開されたものは、この基底の有効性と限界性から無縁なものであるはずがない。

Karl Marx と Max Weber とはともに persönliche Beziehung をとらえている。そして、両者とも、それを個人の Verhalten としての対象への関係行為からとらえている。だが、M. Weber は、とくに、対象へのふるまい [Verhalten] にこめられた主観的におもわれた意味 [Sinn] が存在するときの、人間の行動 [ein menschliches Verhalten] を行為 [Handeln] と規定し、没意味的な行動を除いて行為をとらえた。Karl Marx は、動物には対象への関係行為が存在しないとみるがゆえに、Verhalten を人間の対象への関わり合い、すなわち、人間のふるまいであるとしてみる。さらに、M. Weber は行為が意味上他人の行動に関連づけられ方向づけられている行動を、社会的行為 [soziales Handeln] として、社会的行為をなす行為者が、はじめて、社会的な人間として登場する。そこでは人間が社会的な存在であるがゆえに、自己表出たる社会的行為をなすのではない。しかも、その人間は、協働する諸個人 [zusammenwirkende Individuen] としての現実の人間ではなく、孤立せる抽象化された個人であり現実の具体性を有する人間ではない。かかる個人が行為者として自己の行動を他者のそれへと意味的に関連づけられる [bezogen werden]、その関連 [Beziehung] を、社会的関係 [soziale Beziehung] とみたのであった。

したがって、M. Weber においては、孤立せる個別的な人間が社会的行為を介して他者と関連づけられるのは偶然であるにすぎない。それが偶然的であるから、その偶然性は主観的におもわれた意味、ないしは意味連

関・動機から理解されるものなのである。その動機が理解されぬかぎり、行為者と他者との関連・関係 [Beziehung] は、一般的・総称的な sozial な性格としてしか、とらえようがないものである。それゆえに、それは »soziale« Beziehung である。行為の動機が理解されて、その動機から始めて soziale Beziehung が合理性と非合理性との対比において Vergesellschaftung と Vergemeinschaftung とに類型化されえたのである。

そのことは、また、非合理性をその根拠とした Vergemeinschaftung に諸個人の人格的な関連 [persönliche Beziehung] を、合理性をその根拠とした Vergesellschaftung に、歴史を合理化の歴史とみなしながらも、諸個人の非人格的な関連 [sachliche Beziehung] を、より多く認めざるをえなかったことにもなったのである。

他方、Karl Marx は、関係行為 [Verhalten] を対個人間に限定せず、対自然への関係行為としてもとらえている。この関係行為を対象化したものが社会的関係 [gesellschaftliches Verhältnis] と自然的関係 [natürliches Verhältnis] であり、これらの諸関係を再び自己のものとして獲得・領有 [Aneignung] することによって、人間が自己の力能 [Vermögen] を豊かにする営みを生活活動としてとらえたのであり、その活動が Verhalten として示されたのである。しかも、それは個別的な個人でなく協働する諸個人の営みとしてのみあり、そこでの関係 [Verhältnis] の基底には、つねに、諸個人相互間の人格的な関連 [persönliche Beziehung] をみているわけである。だが、交換や比較の不可能な人格 [Person] が計測可能な・比較可能な関連 [maßbare oder vergleichbare Beziehung] をもなすものであれば、関連の様式 [Art der Beziehung] を意味するとともに、Verhalten の貫徹をも意味する Verhältnis として諸個人間の関係が表現されざるをえない理由があったといえよう。それゆえに、社会的関係は、具体的な諸個人の協働の意味での gesellschaftlich でなければならず、また、社会的関係は、上述の意味での Verhältnis でなければならなかったと考える。

つまり、社会的関係は、K. Marx においては、つねに、gesellschaftliches Verhältnis なのである。

この gesellschaftlich が、諸個人の無媒介的な協働として表現されたのが gemeinschaftlich であり、そこでの協働の関係は Verhältnis の基底をなしていた persönliche Beziehung の直接の表出としての Beziehung であるともいえよう。

諸個人が、正に、共同存在者 [Gemeinwesen] であり、また、そうでありうるのは gesellschaftliches Verhältnis においてのみであり、そのかぎりでは、Verhältnis の基底をなす persönliche Beziehung の視野が開かれるのである。社会的関係 [gesellschaftliches Verhältnis] は、それがいかに物的な姿態をとった関係であろうと、その関係の社会性 [Gesellschaftlichkeit] のうちに、共同存在者である自己の表現を——制約された姿態をとろうとも——みなければならぬ。

したがって、人間の倫理性 [Sittlichkeit] は、具体的な諸個人相互間の関係の社会性に基礎をおくものであるはずである。しかも、それは、共同存在者としての諸個人の直接の協働、すなわち、gemeinschaftliche Beziehung を基盤とし、各自が自己の Gemeinwesen を、協働を通して対象化し獲得すること以外に人間の倫理性は存在しない。それは、決して、M. Weber のいう Vergemeinschaftung を基盤とするものではない。なぜなら、倫理性は、上述の意味での Verhältnis が社会性 [Gesellschaftlichkeit] を有することのなかにしか、人間が人間である根拠がないからである。[1975・10・30]

注

- (1) K. マルクス著・細見英訳・「ジェームズ・ミル著『政治経済学要綱』(J. T. パリゾ訳、パリ、一八二三年)からの抜粋」『マルクス・エンゲルス全集』40 巻、369 頁、大月書店]

- (2) (1)に同じ. ただし, 引用文中の[]内は, 引用者によるもの. 以下, [] は同様である.
- (3) K. マルクス著・真下信一訳「1844 年の経済学・哲学手稿」〔『マルクス・エンゲルス全集』, 40 巻, 459 頁, 大月書店〕
- (4) K. マルクス・F, エンゲルス著・広松渉訳「新編輯版・ドイツ・イデオロギー, 第一巻 第一篇」, 24 頁, 河出書房新社.
- (5) (1)に同じ. 372 頁.
- (6) (4)に同じ. 26 頁.
- (7) (3)に同じ. 437 頁.
- (8) (4)に同じ. 28 頁.
- (9) (4)に同じ. 28 頁. 30 頁.
- (10) (3)に同じ. 459 頁.
- (11) M. ウェーバー著・浜島朗訳「社会学の基礎概念」〔現代社会学大系, 5 巻・「ウェーバー社会学論集」所収〕85 頁. 青木書店
- (12) (11)に同じ. 142 頁.
- (13) (11)に同じ. 143 頁.
- (14) (11)に同じ. 145 頁.
- (14) (11)に同じ. 144 頁.

„Soziale Beziehung“ und „Gesellschaftliches Verhältnis“

Hideo Ohbuchi

Max Weber hat einmal mit besonderem Nachdruck behauptet, daß nicht alle menschlichen Berührungen von sozialem Charakter sei, daß nicht jede Art von menschlichem Verhalten als soziales Handeln angesehen werden könne usw.

Nach den Behauptungen Max Weber also könnte das soziale Handeln derart aufgefaßt werden, daß es aufs Verhalten anderer und aufs von den anderen orientierte Verhalten bezogen werden solle. Die soziale Beziehung sei andererseits eine Beziehung, die die Handelnden miteinander teilten, d. h. ein je nach dem Sinngehalt gegenseitig eingestelltes und davon orientiertes Sichverhalten der beteiligter Handelnden.

Max Weber kategorisiert die soziale Beziehung in zwei Gattungen: Vergemeinschaftung und Vergesellschaftung. Die erstere bedeute die soziale Beziehung eines Handelns, welches auf subjektive gefühlter (affektuelier oder traditioneller) Zusammengehörigkeit der Beteiligten beruhe. Die letztere sei die soziale Beziehung eines Handelns, welches auf rational (wert- und zweckrational) motiviertem Interessenausgleich oder Interessenverbindung beruhe.

Konsequenterweise habe, so Max Weber, die soziale Beziehung teils den Charakter der Vergemeinschaftung, teils den der Vergesellschaftung.

Der Mensch, wie den Max Weber bestimmte hat, kann kein wirklich existierender Mensch sein. Max Weber kommt also nie dazu, das menschliche Verhalten als gesamte Tätigkeit wirklicher Individuen oder als Zusammenwirken von denen aufzufassen. Mit dem Begriff: „soziale Beziehung“ ist bei Max Weber also nur auf

ein abstrahiertes Menschenbild bezogen.

Karl Marx begreift dagegen die Menschen als wirklich zusammenwirkende Individuen und die Gesellschaftlichkeit des menschlichen Wesen als Zusammenwirken mehrerer Individuen, die im Zusammenhange stehen.

Das Verhalten der Menschen kann als Ausdruck des menschlichen —gesellschaftlichen Wesens gefaßt werden, ihr Verhältnis zueinander als ein in der Gesellschaft objektiertes Verhalten.

„Gesellschaftliches Verhältnis“ erklärt sich aus der Vergegenständlichung des auf menschlichem Wesen beruhenden Verhaltens. Von diesem Gesichtspunkt aus begreift Kar Marx menschliches und gesellschaftliches Wesen als Gemeinwesen.

„Gemeinschaftliches Verhältnis“ gemeint, wenn es unmittelbarer als Ausdruck von persönlicher Beziehung der Individuen zueinander, und als unmittelbarer Ausdruck von Gesellschaftlichkeit der Menschen gefaßt wird.

Aber dieser Ausdruck bedeutet nicht immer die menschliche Beziehung als solche, sondern, in Wirklichkeit, unter den gesellschaftlichen Bedingungen borniertes Verhältnis der Individuen zueinander. Gesellschaftliches Verhältnis im hier verstandenen Sinn dieses Wortes faßt in sich gemeinschaftliches Verhältnis, d. h. gemeinschaftliche Beziehung.